W校中高等部だより
のみの市特集

平成二十八年（２０１６年）十二月十日
ニューヨーク補習授業校ウェストチェスター校

十一月十七日に中高等部主催の「のみの市」が開催されました。九月三日には第一回のみの市委員会が開かれ、そしてそのひからのみの市委員を中心に、今年度の生徒会の目標の「完全燃焼」を達成するため、中高等部全員がそれぞれ一人ひとりが力いっぱい活動してきました。

今年は、中等部一年一組・一年二組・二年・三年生・高等部による五つのグループに分かれてブースを出し、各学年とも幼児部初等部向けのゲームコーナー、各家庭から出品していただいたバザーコーナー、保護者の方々からなるベーク製品コーナー、そして生徒たちのアイデアを凝らした食べ物コーナーに分かれて出店しました。また食べ物コーナーでは、高等部一年と高等部二年がそれぞれ別に出店することになりました。

九月から始まったのみの市委員会では、まず最初に収益金の寄付先を決定しました。今回の寄付は四月十四日の熊本地震で被害を受けた益城町の保育園の遊具と図書にのために益城町役場を通じて行われることになりました。。二か月の取り組みで、各クラスの出し物を決定したり、幼児部初等部向けのゲームを決めたり、各出し物の担当者を決めたりと毎週忙しく会議を重ねてきました。意見が合わないこともあったり、思いが同じであったりといろいろなドラマがありました。

のみの市当日。保護者の方々による準備から始まり、一二時少し前にはすべての準備が整いました。幼児部のかわいいお友達が来場したところから会場内は緊張感が広がり、のみの市の雰囲気が高まりました。初等部の保護者の方々や生徒の皆さん、一般のお客様、卒業生など来場してくれ、一時は身動きが取れないほどの混雑ぶりになりました。すべての生徒が忙しく体を動かし、お客様のた



めに最高の笑顔を作り、とても一生懸命頑張っていました。
計画に大きなずれもなく、のみの市は無事終了し、保護者の助けを借りながら後片付け、そして各クラス会計担当による集計も終了しました。最後に今回の集計結果が生徒会会長の阿部紘子さんから発表され、収益金の合計は３６９３ドル６０セントでした。過去最高の売り上げで昨年度を５００ドルもを超える結果になり、大きな歓声が上がりました。生徒たちはこの達成感を忘れることはないでしょう。
のみの市当日、またのみの市開催に至るまでの過程で色々とご支援いただきました保護者の皆様方には心から感謝申し上げます。

私の「のみの市」

中等部一年一組　宮崎真弥

十一月十二日、この日、私たち中学一年生にとっての初めての「のみの市」がありました。私は小学校の頃から兄がのみの市委員をやっている姿をみていて、ほんの少しだけ憧れを感じていました。私がのみの市委員に立候補したのは、兄の影響が大きかったのです。
初めはみんなの前で話すのが恥ずかしかったですが、だんだんとそれが当たり前のようになって行き、逆に、楽しいとさえ思ったことがたくさんありました。私は、のみの市のおかげでクラスメイト一人一人を知ることができ、楽しい時間を過ごすことができました。
もちろん、のみの市から学んだことはそれだけではありません。接客で必要な態度、敬語、笑顔、物を売ることに必要な説得力、そしてお金を得るための対価。このような様々なことを学ぶことができました。
準備をしている間、私は時間が足りるどうか心配していました。だけど、私が知らない間にクラスのみんなはきちんとやるべきことをやっていてくれていたのです。一人一人に仕事を分けみんなで時間が間に合うよう、初めての「のみの市」が成功するように頑張ってくれました。
私は私達が頑張って稼いだお金で、寄付先の幼稚園が少しでも環境が良くなればと願っております。のみの市はとても素晴らしい行事だと思います。来年も頑張って「のみの市」を盛り上げたいと思います。



七転八起

中等部一年一組　　宮西　あかね

エプロンのひもを結ぶ手が震えている。これを見て、私は自分が緊張していることに気がつき、少し驚いた。自信が全くないとか、段取りが理解出来ていない、というような問題は無い。それどころか、以前からクラスのみんなで用意し、先生の助言もいただいて完成したプランは、失敗するわけがない、と確信している。しかし、今日が一番大事な本番だと思うと、どうかこの初めてののみの市が成功しますようにと祈りたくなってしまうのだった。

のみの市は、補習校の中高等部が行う募金集めのためのバザーだ。各クラスがゲームをしたり、出しもの、ベーク品や不要品を売って利益を集める。幼児部の子供たちから保護者の方々までが訪れる、大イベントである。

日本の学校でも、こんなイベントはあるのだろう。しかし、補習校の生徒はみな、普段はアメリカの現地校に通い、土曜日だけ会う仲間だ。まあ、それも醍醐味だと思ってしまえば、大して苦にはならない。私は補習校が好きだし、塾に通っていたのでは「のみの市」のような経験はできなかっただろう。

中等部一年一組では、ベーク品と不要品の販売の他に、輪投げとかき氷の出しものを用意した。利益は熊本県の地震で被災した幼稚園に寄付されることが決まっていた。あとは打ち合せ通りにやればいい…しかし、それが意外に難しい、ということを今回私は思い知ることになった。

スケジュール表によると、まずは幼児部と六年生のための輪投げとガラクタ市を行い、一般公開はそのあとだ。私は不要品売り場の担当になり、お客さんが来るのを待った。

すぐに、その場は小さな幼稚園生たちでいっぱいになった。

「せーの、よろしくおねがいします。」

言うが早いかおチビさんたちは走り回りはじめた。そして何人かがぬいぐるみの入った箱を持つ私のところへやってきた。

「こんにちは。」

あいさつをしようとする私には目もくれず、小さな女の子三人組は箱の中をのぞき込み、一番かわいいのをさがしだした。

あまりに情けない自分



の立場に苦笑いだ。三姉妹の長女という立場にありながら、私は小さい子が苦手なのだ。とってもかわいいのだが、どう扱えばよいのか、全くわからないのである。

「これにする！」

「二十五セントだよ。はいどうぞ。」

「ありがと！」

うれしそうに友達にぬいぐるみを見せるその子の姿を見ながら、私はまた自分が情けなくなった。値段から言い出す以外に何か方法はなかったのだろうか？いつも使わないために、「だよ」はものすごく無理矢理な言い方になってしまった。しかし、反省する間も無く、私はもっとたくさんの小さなお客様に囲まれてしまったのであった。

交代の時間がきた。私は輪投げコーナーの担当になった。そして新しいお客さんである六年生が来た。私は幼稚園児も苦手だが、六年生の扱い方もわからない。「です。」「ます。」で話せるのはいいのだが、今度の問題は相手が自分より身長が高い場合、その人を避けてしまいがちなことである。しかし、それよりも大きな問題があった。お客が来ないのだ。中一の輪投げがある場所は、入り口の反対側で、明らかに最高のロケーションではない。また、その輪投げはなかなか入らなかった。これが何を意味するかというと、呼び込みが必要だ、ということだ。そしてすでにお察しのように、これは私の苦手分野だ。

「向こうで、中一が輪投げをやってます。」

近くにいた六年生に話しかけてみたが、来てくれそうもない。私が六年生でも、こんな誘いには乗らなかっただろう。しかし、そんなことを言っていてはクラスメートに失礼だ。うまくいったとは言えないが、私は私なりに宣伝することにした。次に担当したのはベーク品だ。今や売り場は一般のお客さんで大混雑していた。目の前にクレープの太くて長い列ができていく。私たちの売り場に来る人も、迷ったあげく買わずに行ってしまう人もいた。しかし、私は輪投げの時の失敗を生かしたかった。お客様の立場で考えた接客を心がけるようにした。そして最初のお客に三ドルのおにぎりセットを買ってもらうことが出来た。二十ドル札を受けとり、十ドル札、五ドル札、三枚の一ドル札のおつりを渡した。しかしこれは間違いだった。すぐに小銭はなくなり、私はこれがおまごとは全くちがうと痛感した。

これまでの私の行動は自分でも情けない。しかし、あとから考えると、これらの失敗はあとから成功につながったように思う。

ベーク品売り場の後、私はもう一度不要品売り場を担当したのだが、その時私は相手の立場になって考えることが出来たと思う。リラックマのポーチを持った女の子にリラックマのハンカチをすすめると喜ばれたのは印象に残っていて、私もうれしくなった。

そのあとで私はかき氷売り場の担当になり、会計になった。その時は大きいお札ばかりもらわないように、気を付けることが出来た。

その時、私は初めて達成感をおぼえた。かき氷を持っている人やシェアしながら食べている人がたくさんいる。小さい子が持ったふくろから、私が売ったワニのぬいぐるみのしっぽがはみだして見えた。とてもやりがいが感じられた。

今日、私はいくつも失敗したことがあった。しかし、それを生かすことが出来たことをうれしく思っている。ものを売るという経験は私は初めてだった。そして、私はこれがどれほどやりがいのある仕事かということを忘れないだろう。

初めての蚤の市

中等部一年二組　堀内　恵理奈

私は今日、初めての蚤の市がありました。本番の前の日には、「緊張感」と「楽しみ」という気持ちが混じり、なかなか眠れませんでした。

本番当日、幼児部さん達が思っていたよりもたくさん遊びに来てくれたのでうれしかったです。しかし六年生の部になると、皆雑貨コーナーに集中していたため、結局ゲームをやってくれた人は五人くらいしかいませんでした。九龍球も最初はあまり売れていなかったけれど、先生を初め、広告の人達が実際に表で売ってくれていたため、とてもスムーズに九龍球を売ることができました。そして、無事に完売することもできました。



休憩中、私は他の学年やクラスの食べ物（そうめんとかき氷以外）を全て食べてみました。ものすごくおいしかったし、一つ一つが丁寧に作られていることがとても良く伝わってきて、普段買っているお店よりもおいしく感じました。

各クラス、学年の集計が終わって、今年の寄付金額の合計発表の時、私は今までになかったやりがいと達成感を感じることができました。そして寄付金が思っていた以上に多く、びっくりしました。

私は蚤の市を通して、「ボランティアの大切さ」と「チームワークの大切さ」を学んだ気がしました。このことをこれからも生かせて行けたらいいなと思います。

のみの市の思い出

中等部一年二組　中村　真里菜

この前の土曜日は、初めての「のみの市」でした。幼児部と六年生の時とちがって、今回は、お店を出すので、とても楽しみでした。

一年二組の出し物は、「九龍球」という台わんのデザートとダンボールで作ったボール投げのゲームでした。のみの市のために、一年二組のみんなで、助け合ってポスターを作った

り、ゲームを作ったりしました。どんなフルーツがいいかも、みんなで決めました。

のみの市で一番楽しかったのは、ベークセールでお店の当番をした時です。なぜなら、ざっか売り場にいた時、みんなあまり何も買ってくれなかったからです。一年二組のお店の場所がコーナーだったので、あまり人が来なかったような気がします。

ベークセールでは、クラスが終わった小学生の子やそのお父さんとお母さんたちが、お店に来て、色々なものを買ってくれました。お店をしていて思ったことは、クッキーやマフィン、ブラウニーなどのデザートは、あまり人気がないという事です。アメリカの学校だったら、みんなあまいものを好きなのになあと思いました。人気があったのは、おにぎりやおすしやミニべんとうなどといったごはんの入ったものでした。来年は、お母さんに私の好きないなりずしをリクエストしようと思いました。



集まったお金は全部で、三千六百九十三ドルだったそうです。このお金が地しんで被災した保育園に寄付されます。本などを買うお手伝いが出来たと思うとうれしいです。みんなで協力して、一つのことをするという事は、本当にすばらしいなと思います。現地校では、こういった事は、体験できないなあと思いました。だから、中等部を続けて、本当に良かったなと思いました

のみの市

中等部二年一組　　山岸ホールデン

十一月十二日は、ぼくにとって二回目ののみの市でした。のみの市が始まる前は、みんながわくわくしていました。クラスで何か月も前から準備を行って、最後までがんばりたい気持ちでいっぱいでした。

カフェテリアにぼくたちが入ったと思ったら、すぐに幼児部が入って来て、すごく混みました。幼児部にゲームをやらせたり、おもちゃを売ったりして、おもしろかったです。

幼児部が出て行った後すぐに、六年生が来て、ぼくは大声で宣伝をしました。けれども、ゲームはほとんど誰も遊んでく

れませんでした。その理由は、６年生には赤ちゃんっぽいゲームだったからだと思います。最後は一番混むグループです。いろいろな人が来て、ぼくが働いていたベークセールのたくさんのランチが売れました。ぼくのお母さんが作った焼きそばが売れて、熊本県に寄付されると思うと、うれしくなりました。

のみの市が終わるまでみんなでがんばって、今までで最高記録のお金を寄付できることになりました。熊本のためにいっぱいお金を寄付できたのは、すごくうれしかったです。また来年も、記録を更新したいです。



自分と「のみの市」

中等部二年一組　武田華佳

私が今年の「のみの市」を通して学んだことは二つあります。一つ目は「声を出す」ということです。声を出すことは、とても大事だと思います。なぜなら、声を出すか出さないかでお客さんの数が違うからです。大きな声を出すほど、こっちを向いて興味を持ってくれる人が多いし、いい宣伝になることを実感しました。二つ目は「思う」ということです。思うことは大切だと思います。なぜなら、被災者のことを思うことでより頑張れるし、「ありがとう」と来てくれるお客さんのことを思うと、お客さんも気持ちが良くなります。逆に思うことがない（感謝の思いがない）とお客さんも自分自身も嬉しくありません。

今年と去年の「のみの市」を比べると、去年のフルーツポンチの方



が、売り上げがよかったです。今年のどこが失敗だったかというと、中一の出し物とジャンルが重なってしまったことが、少しよくなかったのだと思いました。ゲームでは、幼児部の子たちのことを気遣いながら喜んでもらえるようにできたので、とてもいい結果を出せました。去年も今年も飲み物を出したので、来年は食べ物系の出し物にできたらとてもうれしいです。

今年、集まった金額を熊本の被災者に送るということは、自分が頑張った分だけ被災者の方々の役に立つ、ということだと思います。私は声を出すことが得意ですが、他のみんなも自分が得意なことを使って、今年の「のみの市」を将来何かに生かすことができるといいと思います。そして、やってよかったことや、ここをこうすると売り上げがもっとよくなったことを、来年につなげて、また楽しくいろいろな人を助けられる「のみの市」にしたいと思っています。

のみの市

中等部三年一組　保山建人

僕たちは、この間のみの市を行いました。中三は出し物として、もぐらたたきとおそうめんを出しました。のみの市の前に、最初にクラスで出し物の事を話し合っていて、おそうめんに決まった時、僕は、「おそうめんは、あまり売れないだろうな。」と、思いました。それは、季節はずれで、麺がのびそうで、おそうめんがたくさん売れる確率は比較的低いと思っていたからです。しかし、中三のクラスの皆はおそうめんに賛成したので、それに決定になりました。

のみの市当日、中高等部は、十一時四十五分に全員カフェテリアに向かい、準備をしました。十二時に幼児部の子ども達が来て、雑貨を買ったり、楽しそうにもぐらたたきをしたりしていました。もぐらたたきは小さい子には好評だったようです。次に六年生も来ました。しかし、そこでは残念ながら中三はあまり売り上げが上がりませんでした。

十二時四十分から一般公開が始まり、本当の勝負が始まりました。僕は、最初雑貨の売り場にいたのですが、休みをとってからおそうめん売り場の方へ向かいました。すると、思っていたよりずっとたくさんの人が買いに来ていました。行列の間を抜けていかないと売り場まで行けなかったのですごくびっくりしました。とにかく忙しく働き、のみの市が終わるころには百食以上用意したものが完全に売り切れになったので、びっくりしました。そして、



どうしてこんなに人気だったのか理解できませんでした。

しかし、のみの市が終わってから、家に帰る途中、のみの市をゆっくりと振り返ってみたら、「美味しい。」とたくさん買いに来てくれたお客さんがいたことや、友だちやお母さん方がお客さんを呼び込んでいる姿が目に浮かんできました。そして皆が一生懸命に団結して働いたから売り上げがこんなにあったのだと思い至りました。今年ものみの市は自分にとってすごくいい経験になったと思います。



蚤の市

高等部一年　押川　春香

十一月十二日、蚤の市がありました。これは、私にとって二回目、高等部に入ってからはじめての蚤の市でした。今、終わって振り返ってみると大成功だったけれども、実はたくさんのことがあったように思います。

まず最初に、今年の高等部は例年とは異なり二学年に分かれて出し物やゲームを行いました。隣の二年生が毎年恒例のクレープや、ゲームについて順調に決めている間、私たちはなかなか全員が揃わないこともあり一つのことを決めるのに手間取っていました。本当に全てのことが決まったのは本番の一週間から二週間前で、かなりギリギリのスタートでした。



蚤の市前日の金曜日は何人かで一人の家に集まり、みんなでわらび餅をつくりました。三時間弱かけて大量のわらび餅を作り上げ、大変だったけれど達成感がありました。また、一緒に作ることができたことによってみんなとの距離が少し縮まった気がします。

次の日、蚤の市当日は眠い目をこすりながら補習校に行きました。午前中は睡魔に襲われていたものの、いざ午後の蚤の市本番になるとその眠気も吹っ飛びました。午後は目が回るような忙しさだったけれど、幼児部の子達が喜んでくれたり、色々な人に自分達が作ったものを食べてもらうのは嬉しかったです。わらび餅が全て売り切れたときは作り終えたとき以上の達成感がありました。また、補習校全体としても過去最高の寄付金を集めることができました。

私が今回の蚤の市を通して学んだことはみんなで作り上げることのできるものの大きさです。結果ももちろんとても良いものだったけれど、たくさんの人の力で支えられていると感じることができた蚤の市だったのでよかったです。

三回目のわらび餅

高等部一年　清水　美緒

皆で泊まってクレープ作りをするというのは、私が高等部に進学したかった大きな理由です。兄が楽しそうに徹夜してクレープを作った話を聞いて、絶対に私もしたいと思っていました。ところが、今年は高等部が多すぎるので二学年に分かれることになって、クレープ作りがなくなってしまいました。高一の出し物はどうするか、色々と意見が出たのですが、結局わらび餅になりました。しかし、私にとっては、わらび餅、三回目の出し物です。「また、わらび餅か。ちょっとつまらないなぁ。」と思いましたが、なんといっても残念なのは、お泊りがないことです。とてもがっかりしていたのですが、なんと、わらび餅をお泊りで作る企画を蚤の市委員の宮崎君が作ってくれました。

全員は集まれませんでしたが、できる高一の生徒だけ集まり、まずはわらび餅作りです。去年までは、母と一緒に混ぜたり、きな粉をまぶしたり、と私はどちらかというとお手伝いみたいでしたが、今年は生徒だけで協力作業です。鍋をかき混ぜる人、パットに伸ばす人、きな粉をまぶす人。レシピも同じですし、やっていることは、去年ま





でと同じことなのですが、何故だか何をしても楽しくてたまりません。いつもクラスで一緒にいるみんなですが、授業とかお弁当の時間より楽しいのは、わらび餅を作るという同じ作業をしているからなのかもしれません。三度目のわらび餅、今までの最高のできになりました。

そして蚤の市の当日。最初はなかなか売れなかったわらび餅で、クレープの列が長いのに比べて、わらび餅は少しずつ人が来る感じで心配でした。でも、お持ち帰り用なども作って、完売できました。終わってみると、今年の蚤の市の募金額は、過去最高でした。それも、高等部だけでも、過去最高。二学年で集まった金額は、思っていたより多くて、びっくりしました。最初は、高等部全体でクレープ作りができなくて残念だと思っていましたが、二学年で別々のものを作ったので、逆にその分売り上げも上がったようです。なるほど、では、来年も二つ別の出し物をするのも悪くないな、と思いました。

蚤の市は募金活動として、とても大切なイベントですが、それよりも、私は友達と一緒に過ごした時間が何よりも大切な思い出になりました。大きくなっても、わらび餅を食べるたびに、きっといつも補習校のわらび餅スリープオーバーを思い出して、こっそり笑ってしまうと思います。

のみの市感想

W校高等部二年 小野元暉

二千十六年度もまた、毎年恒例ののみの市が行われた。また、これは僕の補習校生活の最後ののみの市でもあった。

出し物は高二の定番のクレープ。人気はいつものように抜群だった。前日にクラスメイトの家に集まり、必死にクレープを焼いた。当日は小学生向けのゲーム、一般客向けのクレープ、などなど自分たちの仕事を熟すのは大変だった。しかし、これは中一の頃からやっているので正直もう慣れたことだった。

いつもは高等部、高一と高二はともに出し物をしたが、今年は高一のクラスが多いため、各学年に分かれた。なので人数が少ない高二は一人一人の仕事が増え、休む間もなかった。最後まで同じ学年の仲間たちと一緒にいられたことは嬉しいことだが、後輩たちと別々となり、絆があまり深まらなかったことが少し残念だ。

今年ののみの市は形としては前とあまり変わらなかった。しかし、心境はまるで別だった。客の行列が終わった時などにふと、

「これでもう最後なんだな。」

という思いが浮かんでくる。年寄りくさいが中一で初めてかき氷を出したのがついこの間のように思える。そして中二のタピオカバブルティー、中三のフルーツドリンク、高一の先輩たちと焼いたクレープ。記憶が色々と頭の中に浮かんできた。そして記憶と共に、今は補習校にいない、かつての仲間たちも現れた。それは心の中だと思うと、なぜかその顔がクレープの列に並んでいる。そう、僕らの最後ののみの市にかつてのクラスメイトが駆けつけてくれたのだ。そして古い仲の間で当時の思い出や、今の思いを語った。もう何年も会っていないのに、まるで一緒のクラスに座っていた頃と同じだった。





この補習校で築かれた絆は時をも越え、今も、これからも、生き続ける。だから僕はこののみの市が最後だからといっても悲しいとは思わない。時にはこれから先はもうのみの市がないと思うと残念に感じるだろう。だけど本当に、心から悲しいという時はないと分かる。なぜなら、数々の仲間たちとの思い出や絆が心の中でも、実際の世界でも、ずっとあり続けるから。

